

## イラン研修の学びと悦び

坪山 倫  
東京大学文学部社会学専修 4 年

「この研修に参加することができて良かった」。研修期間中、そして研修が終わってから、私はこの言葉を、枝葉を変えながら何度口にしてきたか分からない。それほどまでに、このイラン研修を通じて私が得たものは大きく、同時にその大きさの全様を把握し切るためには、まだ途方も無い時間を要するような気がしている。しかしまずもって明晰判明なのは、イランに滞在した十一日間の中で、私はこれまでの人生におけるどの十一日間よりも巨大な感慨的刺激を被り、また同時に、これまでの人生におけるどの十一日間よりも深く、ある一群の人々と触れ合い、語らい、それを通じて自らの将来や目標に対する熟考を繰り返した、ということだ。

振り返れば、12月の初頭、イラン研修参加の合格を告げるメールを受け取った瞬間、私はそれほど大きな悦びを感じてはいなかった。いや、正確には、自身があの厳しい選抜を乗り越えイランでの研修に参加できるということの悦びの、大きさを計り知ることには未だ成功していなかったのだと思う。私はその悦びを、プログラムの行程が進むにつれ徐々に理解していった。

その「悦び」の大きな部分を形成していたのは紛れもなく、素敵な日本人学生メンバーとの出会だった。それぞれが個性的でありながら、同時に、総体として「仲間」であることを認識できる共同体に、私は久しく出会っていなかったように感じる。だからこそ、明白な門外漢として参加したこのイラン研修を通して、そのような仲間を発見し、彼らとの絆を各人と等しく深められたことは、私にとって非常に大きな悦びとなった。研修期間中、外国にいることやプログラムをほとんど完全にコントロールされていること自体に起因するストレスも無いわけではなく、また道中のトラブルも少なくなかった中で、メンバー内の人間関係的な悲劇を伴うことなく、いつも笑いが絶えない空間が保たれたのは、偏に各人の人間性と他者理解能力に依るところであると確信している。私は彼らの姿勢を見て、何度も己を反省し、また最も広い意味におけるコミュニケーション能力を涵養することが出来た、と言い切れる。各々がこれからどんな道でどのような活躍をしていくのか、素直にとてもとても楽しみであるし、私自身も、ある意味では皆に対して決して恥ずかしくない様、自らの生を全力で生き続けようという決意を固めている。

また、引率を担当してくださった笹川平和財団の穴田さん、木村さん、横山さんには、研修期間中における学生の楽しみと学びを最大化するために尽くしてくださったことに対する感謝の念に耐えません。私とその精神的なルーズさゆえ、待ち合わせに（何度か）遅刻した際にも、その寛容な心で受け止めてくださったり、他のメンバーが怪我をしたり体調を崩した時にも常に側で支えてくださったりと、枚挙に遑が無いほど多くの場面で助けになってくださったこと、改めて、本当に有難うございました。

さて、私は、大学生活の中で自らがイランに赴くことになろうなどとは、数ヶ月前まで想像だにしなかった。私の人生に対して、いわば青天の霹靂の様に舞い込んだ今回のイラン訪問を通じ、私が学び得たことの一端を、ここに記そうと思う。

第一に特筆すべきは、国際情勢に対するイランの姿勢についての学びである。私は教養学部時代から、主に英米の新聞、ならびに欧米の学者によって生み出される国際情勢の描画に親しんできた。そのような中で同時に、内藤正典氏の著書などを読むことを通して、件のような支配的なパースペクティブに寄らない仕方、世界の有り様を描く人々と直に触れ合いたい、という思いを強くしていた。今回の研修は、その願いが果たされるための第一歩を完璧に演出してくれたように思う。SIRの先生方や、イラン外務省の方のお話を伺うことで、外交の最前線に立つイラン人が、世界の事情をいかに捉え、例えばアメリカに対して、核合意をめぐる歴史に対して、あるいは日本という国に対して、どのような考えと先入見を抱き、どのような期待をしてどのような期待をせず、またそのような考えの上に、イランの国際関係的座標や行く先についていかなる思いを寄せているのかを、知ることが出来た。ただし、私がここで「第一歩」として譲歩しているのは、今回の研修を通じて得られた視点が、基本的に外交を司る方々の視点に過ぎず、その重要性は言わずもがなでありながらも、無視してはならないイラン市井の声に対しても、より丁寧に耳を傾けることをしたい、という考えも、今回の研修によって強められたことに因る。私はこの先の自分に与えられた生を存分に活かし、そのことに従事していきたいと思う。

加えて言及したいのは、イランの文化物に宿る魂についてである。渡航前の私は、イランの、あるいはペルシアの文化に対し、世界史の教科書を通じて暗記したり、メディアを通じてその表層に触れたりした程度の知識と理解しか備えていなかった。しかし、現地に赴き、それまで教科書やテレビの上のものでしかなかったミニチュールやカーペット、ラクダの骨細工の彩色などに対して、自らの五感を通じて体験される身体性と文化的真性が付加され、知識と理解が深まると同時に、それらを貫く真髓的なアウラをも、垣間見ることが出来たように思う。文化というのは、それを育む土地やそれに直接携わる人々と全く不可分なものである。私はこの研修の至る場面においてそのことを再認識すると共に、向後における文化社会学的研究に対しても、この旅で獲得された文化に対する直観と洞察とを纏わせてゆければと思う。

末筆ながら、既述の内容とも一部重なりますが、この研修を通じて、この研修を通じてしか得ることのできない体験と思考とを、私が得ることができたことについて、それを明に暗に支えてくださった全ての方々への感謝を申し上げます。この体験を根本で可能ならしめて下さった笹川平和財団ならびにSIRによる経済的支援には、繰り返しになりますが感謝の念に耐えません。また、本プログラムを企画し、行程を管理し、参加者同士の交流を促進し、そして我々の安全確保に対して全力でご尽力いただいた全ての方々に、感謝を申し上げます。この素晴らしいプログラムが、成長を絶え間無くしながら、未長く継続されることを心より願っております。有難うございました。

笹川平和財団イラン短期研修報告書

坪山 倫

東京大学文学部社会学専修4年

(なお、本所感は執筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものではありません)